

第二回「山梨学院大学・復旦大学学術交流会」を開催しました

6月11日（火）午後、胡令遠所長をはじめとする中国復旦大学日本研究センター学術交流団は本学を来訪し、古屋光司理事長、青山貴子学長を表敬訪問し、『『もしトラ』後における東アジアの協力可能性について』と題する第二回「山梨学院大学・復旦大学学術交流会」を開催しました。



表敬訪問席上、古屋光司理事長は山梨学院大学の発展沿革、教育理念、国際化教育実践などを紹介し、今後、復旦大学とより一層の協力交流を推し進めたいと述べました。胡令遠教授は山梨学院大学からの招聘に対し感謝の意を表し、東アジアの平和、協力、発展を目指して、地域諸国の国民の相互理解を深め、学術交流を促進するべきだと述べました。



学術交流会は二つのセッションを設けました。第一セッション「東アジア経済と地域協力」では、復旦大学日本研究センター所長、胡令遠教授より「中国の日本研究：変化・特色と課題——冷戦後を中心に」、本学国際共同研究センター研究員今井久教授より「日韓両国の交流の現状—山梨総合研究所と忠北研究院との交流を中心に〜」、復旦大学日本研究センター副所長、賀平教授より「地域公共財と東アジア協力」と題する報告を行いました。



第二セッション「東アジア政治と地域協力」では、復旦大学日本研究センター所長補佐、王広濤準教授より「日本の政局変化及び日中関係への影響」、本学国際共同研究センター研究員齋藤雅代教授より「『もしトラ』が日本企業に与える影響についての法的検討」、本学国際共同研究センター研究員高蘭教授より「日米同盟：より対等な同盟からより統合された同盟への提案提起と行き方」と題する報告を行いました。



120名以上の教職員と学生が学術交流会に参加し、多くの学生より内容豊かな報告から多くの啓発をうけ、東アジア諸国の協力、発展の必要性和重要性について認識をさらに深めたと感想を述べました。

復旦大学は、中国において北京大学、清華大学と肩を並べるトップレベルの総合大学の一つです。同大学の日本研究は1964年から始まり、中日関係をはじめ、日本の政治、経済、社会、文化等に関する研究を行い、日本各界との交流を通じて、東アジア諸国、特に日中両国の民衆の相互理解の促進に取り組んできました。